「刹那滅」と「純粋持続」とは輪廻転生／永劫回帰の無限小の「転轍機」、メビウスの帯の表裏をなすのか？
―木岡伸夫『瞬間と刹那　ふたつのミュトロギー』（春秋社、二〇二二年二月一五日）を出発点として

稲賀繁美

西欧に発展した論理形式は、同一律・矛盾律・排中律を基礎とする。これは自然科学の探求においても前提とされ、そこに疑義を挟む研究者は少ない。逆にこの枠組に抵触する思索は、哲学的思惟としても、しばしば市民権を剥奪される。例えばAかつ非Aを容れる「容中率」を思索したルーマニア出身のステファノ・リュパスコは、学会から黙殺された、という（本書三五）。だがこうした論理学の基礎に陥穽はないのか。矛盾律は、「Aかつ非A」は同時に同一の観測地点では成立しない、との前提に立つ。だが何光年も離れた物象同士の「同時性」を観測することは、同時性の根拠を掘り崩す。さらにその前提たる「同一律」が成立するためには、座標軸の数を限定する必要が生じる。そこから漏れた座標軸を採用すれば、同一だったはずの物体や命題は、容易に「同一性」の根拠を失う。単純な例だが、環境の温度が異なれば、物性は変化する。異なる環境下での再現実験は、厳密には再現の定義を満たさない。ここで再現実験を有効と見做す判断は、時間の反復可能性を無前提に認めている。換言すれば、自然科学の実験環境は、自然界の「永劫回帰」を信頼していることになる。

だが佛教でいう輪廻転生は、常識的には迷妄とされる。俗に言う「誰それの生まれ変わり」に根拠はあるまい。とはいえ数億光年離れた距離で同一の「並行宇宙」が存在しないことを、記号論理学は立証できない。同様に人間的尺度を超えた時間軸上に離れている複数の個体が「同一人格」であることを反証するのも不可能。ここまでくると、「同一」の根拠はその根底から揺らぐ。むしろ「同一」とは、もとより特定の認識の枠組みによる「認知」作業により「構成」される「虚構」と見たほうが、論理的に妥当する。人格的同一性は、立法者が認定を取り消せば、もはや法的有効性を失効する。さらに時間軸上での「同一性」の保証、即ち「純粋持続」も、観察者が「反復」を「差異」と知覚すれば、いとも容易に破綻する。

アキレウスの亀やゼノンの矢も同行だが、数列を任意の場所で切断すれば、その両端は定義からして異なる数値を取る。だが切断面は切断される以前には、同一の値を示していたはず。これは論理上の詭弁だが、同一性の保証は、実数の数列を裁断すれば、容易に喪失する。

ここに本書『瞬間と刹那』の領野が拓ける。佛教では「刹那滅」を説く。詳細は捨象するが、唯識であれば、事象は刹那に無に帰しては再生を遂げる。これは意識の次元で捉えるならば、なんら不思議ではない。視覚に限定しても、網膜に映った映像は、断片的で瞬時に動揺し消滅してゆく。ニューロンの発火はコンマ数秒遅延するが、それにも拘らず大脳が安定した持続映像を「同時現象」として知覚するのは、海馬が「錯覚」を「適正」に修正してくれるお陰である。いわば刹那に再発しつづける視覚細胞上の微小なる「輪廻転生」の連続が、「現実」という名の「虚像」を大脳に供給する。「持続した時間」というこの「迷妄」のお陰で、我々は日常生活を大過なく営んでいる。瀑布を落下する水は刻々と入れ替わるが、滝はその形状を持続する。またコマ割の映画も「持続」の錯覚を生む。——もはや明らかだろう。常識としての「持続」

する時間意識こそが、「錯覚としての現実」＝「迷妄」だった。

「刹那滅」における瞬時の邂逅と別離とにおいて「永劫回帰」は無際限に性起している。ここで「純粋持続」は「刹那」と表裏一体であり、「刹那滅」の瞬間に、いわばメビウスの帯のように不意に表裏を転換する。ここではもはや、過去から未来へと定流する通常の「時間の流れ」は無効となる。したがってこの機構に時間軸に拠る因果関係を当て嵌めることは、もとより整合性を欠く。実際、失敗の原因は事後に遡及的に推定しうるが、成功の理由は、往々にして説明を超える。カール・ポパーの「反証可能性」はこの事実を指す。さらに原因究明は次の事故阻止には必ずしも役に立たず、往々にして、かえってさらなる失策を誘発する。これは我々がしばしば体験する事態だが、ここには「因果律」の盲点が示唆されている。

南方熊楠は矛盾律や排中律の支配する「因果」の論理の外に「縁起」や「やり当て」の「不思議」を見たが、ここに「Aかつ非A」および「Aでも非A」でもない領野、二項対立が排除する第三項の「両是」「両非」に跨るtetra lemma即ち「四つ」の次元複合が視野に入ってくる。アリストテレス論理学が排除してきた「両是」「両非」がここで「把握」lambanoされる。山内得立『ロゴスとレンマ』（およびその仏文訳）を導きに、「ロゴス」の「裏」を支える「レンマ」に探りを入れよう。著者の精緻な論述を頼りに私見を弄するならば、九鬼周造の仏文講演「円環的時間論」に見える輪廻思想の再解釈、また大森荘蔵の「重ね描き」による過去の「立ち現れ」は、このレンマへの開口部を狙う。だがこれも私見では、九鬼の議論は詩的修辞の押韻の反復に古代の再来を幻視する「言霊論」へと退行し、大森の「過去の制作」をめぐる議論は、「刹那滅」への深入りを避ける傍ら、「重ね描き」における「うつし」を西洋近代語の「複製」に限定解釈したため、国学の語彙論的可能性を見落としている。

従来、比較思想は、東西哲学の不毛な対話不能の蹉跌を乗り越えようとしながら、期待される成果を容易には挙げなかった。「存在の本質」を問う西洋哲学と、佛教哲理の「空」や道教と習合した禅の「無」との間には、相容れない対立がある―。そうした原理的な二項対立 dilemma の認識が、東西の比較を、かえって相互排除の護教論的対立、動脈硬化へと導いてきた。だがどうだろう。例えば西田幾多郎の「絶対無の自己限定」（本書三〇二）は、ユダヤ思想のカバラーが説く「神の自己収縮」や、キリスト教神学に見る kenosis（神の自己空無化）と、論理的に表裏をなすのではないか。実際、「無」と「有」とに還元される東西対比は、ブール代数における0から1の間の数列の冪乗に関する思索へと媒介できる。「有」の極限たる「一者」と「無／零／空」との振幅として、数学的に「理詰め」な処理が可能だからである。

加えて、晩年の田辺元が「無即愛」を唱え、同じく晩年の西谷啓治が「無即空」を視野に収めたことも、この文脈で更に発展可能だろう。もはや詳述できないが、「東洋の迷妄・虚無」を排斥する呪縛から「輪廻転生」や「無／空」を解き放つ営為は、近年の山下善明 *Identität als Unverborgenheit*、伊藤武邦『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』、大橋良介『共生のパトス』をはじめとする思索や研究で共有されつつ浮上している。それは、別の文脈だが中沢新一『レンマ学』、小田龍哉『ニニフニ』に至る考察とも踵を接する。その傍らでは末木文美士・編『比較思想から見た日本仏教』、廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨・編『東アジアにおける哲学の生成と発展』などの大規模な成果もあげられている。最後の論文集は副題に「間文化の視点から」と銘打つが、木岡氏の先著『〈あいだ〉を開く―レンマの地平』（二〇一四）、『邂逅の論理―〈縁〉の結ぶ世界へ』（二〇一七）が同様の志向に支えられた研究であったことも、歴然とする。以上、「文化伝播の器と蝕変の実相」を追求する、異分野共同研究会の成果論文集『映し

と移ろい』（二〇一九）の編者として、舌足らずは覚悟のうえで、今後の東西哲学の「切り結び」を確保するための〈場＝あいだ〉への期待を込めた鳥瞰を試みた。

二〇二二年三月一三日

（京都精華大学教授／国際日本文化研究センター名誉教授）